

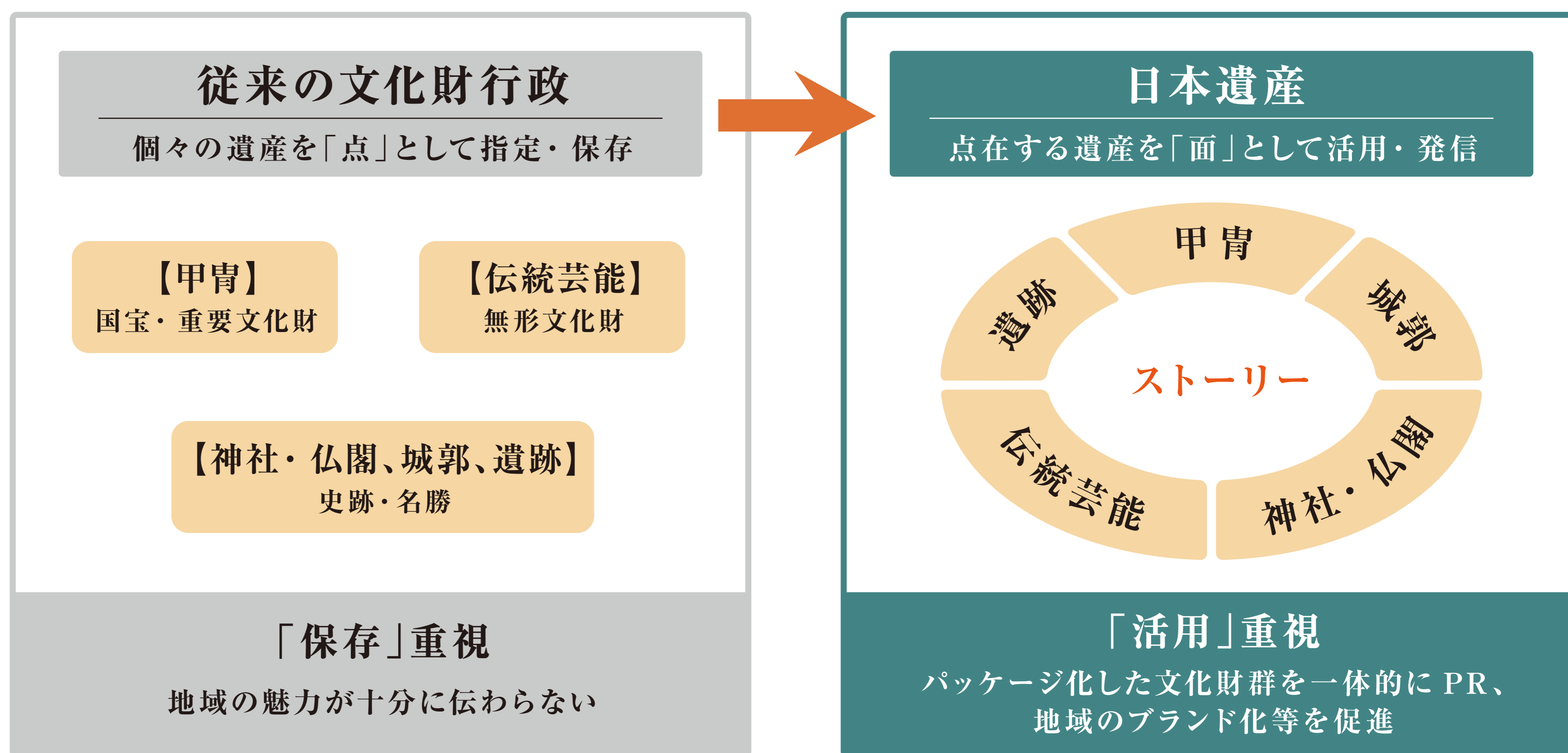
## 背景

これまで、文化財は個々がそれぞれに存在し、地域全体の活性化につながりにくいものでした。こうしたなか、文化財や伝統文化をより効果的に活用し、後世のために保存するためには、有形・無形の文化財を歴史や風習などに纏わるストーリーで関連づけ、情報発信や人材育成などの取組みを効果的に進めることで、地域の価値を高める日本遺産制度が創設されました。

## 目的

文化庁では、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (JapanHeritage)」として認定し、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する取組を支援しています。日本遺産は、既存の文化財の価値付けや保全のための新たな規制を図ることを目的としたものではなく、地域に点在する遺産を「面」として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的としています。

## 従来の文化財行政との相違点



## 認定による効果

「日本遺産」に認定されると、認定された当該地域の認知度が高まるとともに、今後、日本遺産を通じた様々な取組を行うことにより、地域住民のアイデンティティの再確認や地域のブランド化等にも貢献し、ひいては地方創生に大いに資するものとなります。

## 認定件数

「日本遺産」の認定については、平成 27 年度から令和 2 年度までの 6 年間で 104 件が認定され、令和 2 年度をもって文化庁の募集は終了しています。

## 1 「かさましこ」の美意識

関東平野の北部に位置する茨城県笠間市と栃木県益子町＝「かさましこ」。八溝山地けいそくさんかい鶏足山塊の山々を挟んで近接するこの地は、古代から須恵器づくりに必要な粘土・水・燃料の木材に恵まれていました。8世紀～10世紀頃の古代窯跡からの出土品に共通した技法が多数みられることから、同じ技術圏にあったことが分かっています。

11世紀に下野国（現在の栃木県）を拠点とし、その後の約500年間、笠間と益子の地を治めた宇都宮氏は、武士としての面貌にとどまらず京都の貴族との接点を持ちながら宗教・文化という側面に大きな足跡を残しました。浄土庭園を持つ寺院（地藏院）や、当世を代表する仏師に作らせた仏像（木造千手観音立像）等から京都の影響を受けた信仰心の篤さを見ることができます。また、京都・鎌倉と並ぶ日本三大歌壇のひとつに数えられた宇都宮歌壇を作るなど、文化の馨りがこの地に届いていることがうかがえます。

この時代に「かさましこ」にもたらされた京都・鎌倉からの文化・芸術・気風は、後の笠間焼・益子焼の美意識に影響しています。



地藏院 本堂



木造千手観音立像

## 2 兄・笠間焼と弟・益子焼の誕生

16世紀後半、宇都宮氏が豊臣秀吉によって改易され、江戸時代になると2つの地域はそれぞれの歴史を歩むこととなります。

しかし、18世紀後半、笠間藩箱田村の名主久野半右衛門が、箱田村で焼き物（後の笠間焼）を始めます。古代窯で使われていた良質の粘土がこの地にあったことが、窯を開いた理由と言われています。そして19世紀後半、箱田村鳳台院で寺子屋教育を受けていた大塚啓三郎が、久野窯での焼き物作りとの出会いからそこで陶器の製法を修業し、益子で築いた窯が益子焼の始まりとなります。8世紀に同じ技術圏で窯を築いていた2つの地域が、1,000年後、また製陶を通じて同じ未来に向かって進み始めたのです。

明治時代になると笠間・益子それぞれで組合が設立され、笠間焼と益子焼の特約を結んで出荷規格を統一し、連携して製品の融通を図るなど支え合いながら、関東の窯業地として発展しました。そして明治時代から大正時代にかけて、壺、水甕、すり鉢、土鍋などの日用品を製造出荷し、その製品は丈夫で使いやすく、安価であったことから東京を中心に東日本全域にまで販路を大きく拡大することに成功しました。



久野陶園(旧久野窯)



柿釉黒流掛水甕(明治時代 笠間焼・益子焼製品)

### 3 「かさましこ」陶芸に訪れる作風の変化

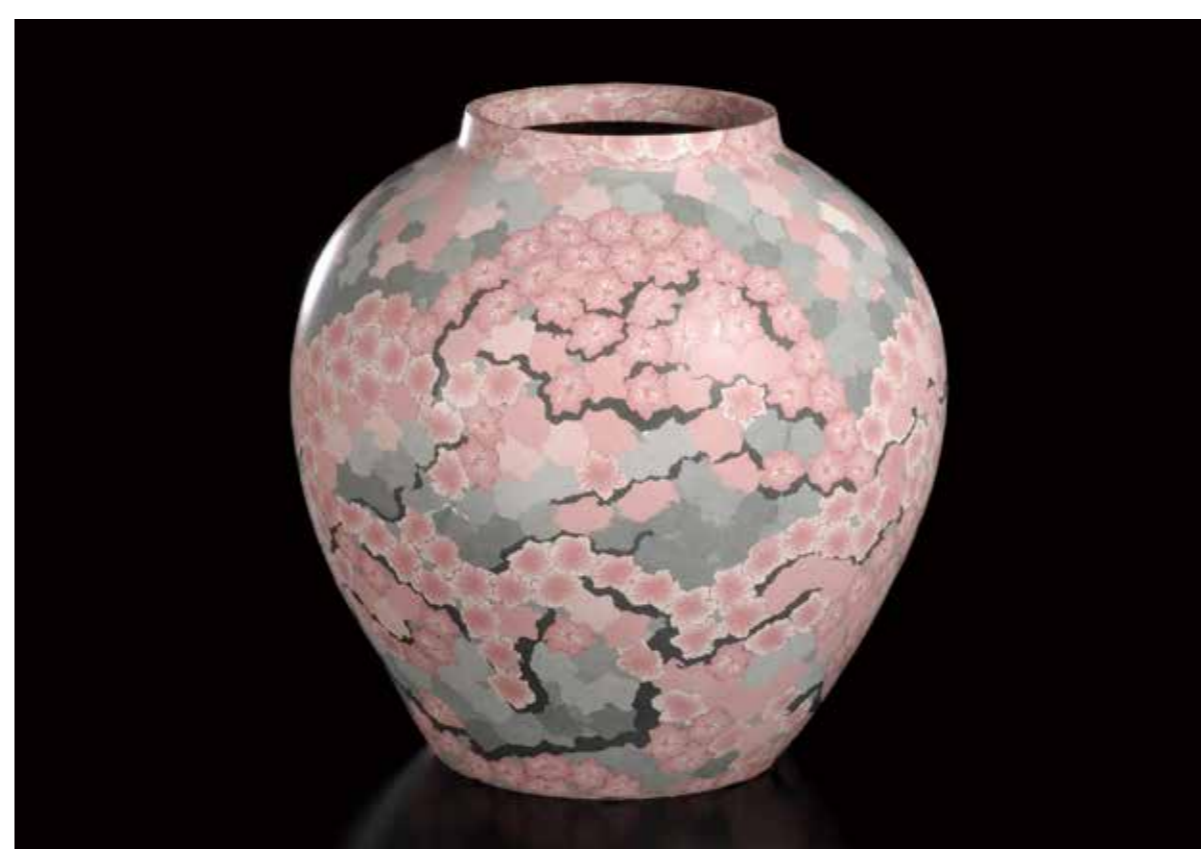
しかし、順風満帆な経営は長くなく、産業発展と生活様式の変化で、「かさましこ」の窯元は生活の危機を幾度となく迎えます。そうした中、それぞれの焼き物に作風の変化が起こります。

最初に新たな風が吹いたのは益子です。昭和初期に手仕事に宿る美を見いだす民藝運動が拡がり、後に人間国宝となる濱田庄司を中心に、職人氣質の窯業地で、芸術性の要素が加わった民藝調の陶器(民藝陶器)が作られるようになりました。昭和20～30年代になると、民藝運動の拡がりには窯業にとどまらず、染織、木工、金工等の職人たちにも伝わりました。職人たちの気取らない素朴ですこやかな心と、伝統に裏打ちされた確かな技術から、時代に合わせた新たな作品が次々と生み出されました。益子参考館を訪れば、濱田庄司が制作のヒントにと集めた世界中の工芸品と民藝のある生活感があなたを出迎え、五感が洗われるような、すがすがしさを体感できます。

一方、笠間は、戦後、窯業地としての存続が危ぶまれると、茨城県が窯業指導所を設立し、デザイン性を重視した工芸陶器への転換を目指して釉薬改良や粘土研究、デザイナー等による指導が行われました。さらに、県内外から才能ある陶芸家を招くために、官民が協力して造られた窯業団地や笠間芸術の村には、陶芸家の他、絵画や彫刻、鋳金、染色、織物等の芸術家が移住し、地元の窯元、陶工と互いに刺激し交流を深めました。こうした中で斬新な表現と技法が生まれ、後に人間国宝となる松井康成は「練上」という技法で笠間焼を芸術の域にまで高めました。また、殖産興業の神を祀る笠間稲荷神社も仲見世や門前町などで笠間焼を販売したり、笠間焼の歴史的資料の保存・公開のために境内に美術館を建てたりと支援を行ったのです。



柿青釉白格子描大鉢(濱田庄司作品)



練上玻璃光大壺(松井康成作品)



笠間稲荷神社拝殿

## 4 陶文化を創造、進化する「かさましこ」

「かさましこ」の街並みには四季を表現する雅な陶壁、散策路にはリズムを生み出す波型の陶板タイルなど、日常の中にアートが溶け込んでいます。工房を訪れると、陶芸家が土と向き合う真剣な姿と電動ロクロが回る音が響く、凛とした雰囲気を感じることができます。

かつて暮らしを支える日用品を製造していた「かさましこ」は、デザイン性や機能美を追求したうつわや親しみやすいポップなオブジェなどを制作し、暮らしに潤いを与える窯業地へと進化しています。時代の需要を敏感に感じ取り、変化をいとわない産地の挑戦が表現の多様性を育んでいます。そんな陶の郷を求めて全国から陶芸家が集まり、今では600名を超えるまでになりました。自由で開放された制作環境を体感（見学）できるオープンアトリエや、窯元や陶芸家の指導によるロクロや手ひねり等の体験を通じて作り手の想いや技に触れることができます。そして、販売店やギャラリー、カフェ、レストランが軒を連ね、彼らが創るうつわや生活雑貨、オブジェなどの美しい生活造形が食卓や空間を彩り、訪れる人の五感を楽しませてくれます。

互いの地域の陶芸家が独自に合同で個展を開いたり、東日本大震災によって崩壊した濱田庄司ゆかりの登り窯を復活させたり、全国の陶芸家たちが一緒に窯焚きを行ったりと、近年「かさましこ」の連携は官民を問わずますます進み、絆を深めています。

そうして兄弟焼き物の笠間焼・益子焼はつながり合って、暮らしに寄り添う独自の陶文化を醸成しています。



笠間芸術の森公園陶の杜



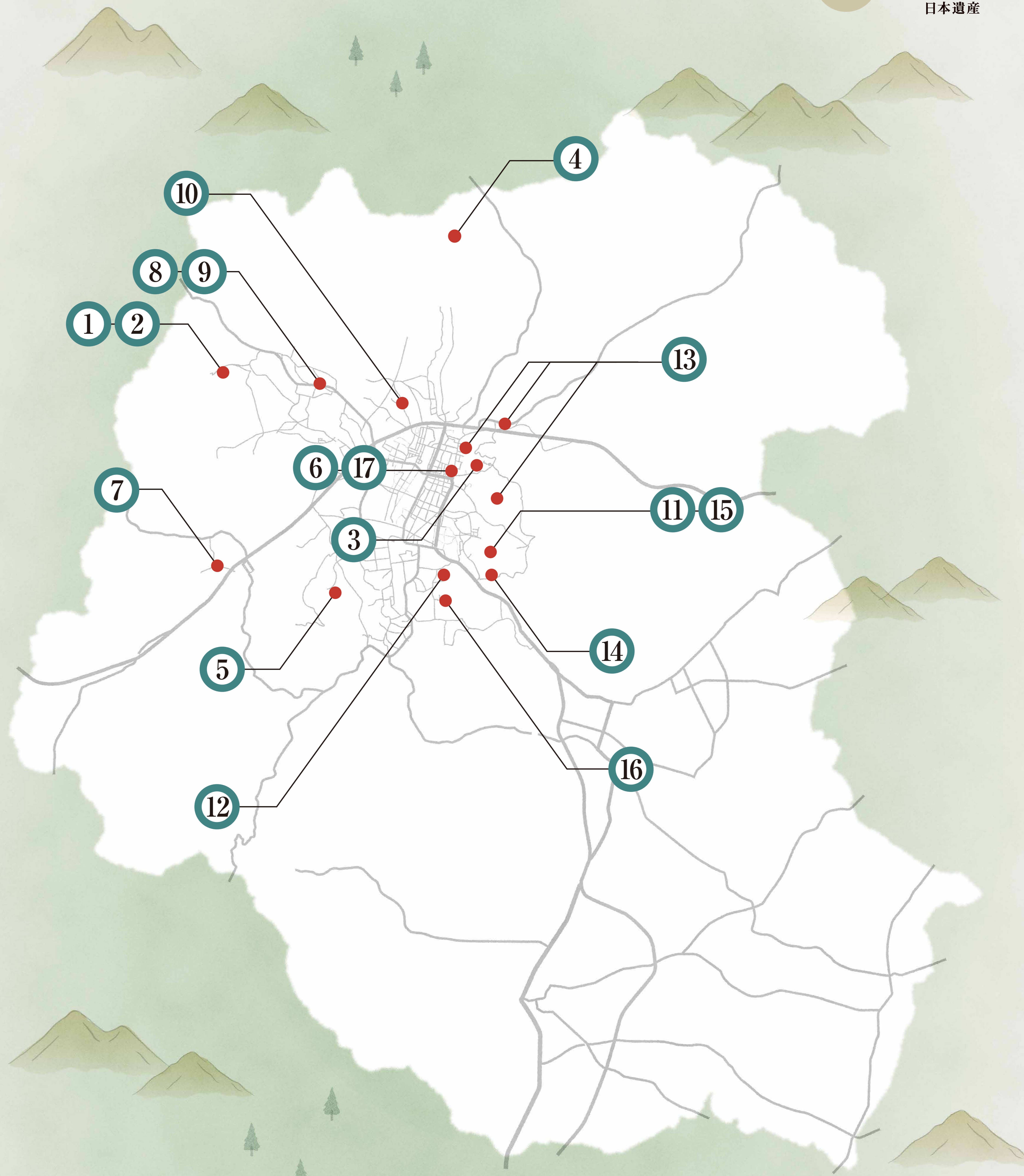
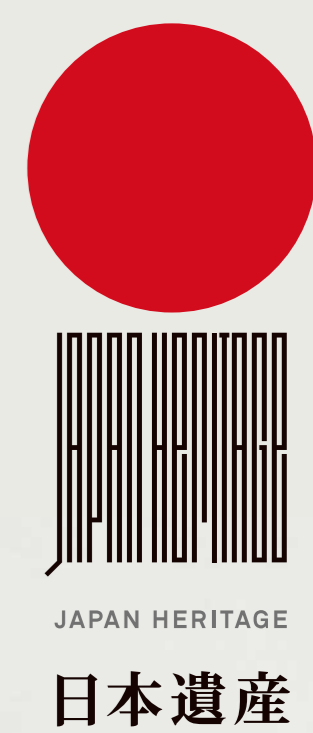
陶芸体験



デザイナーとのコラボで誕生した益子焼 (BOTE&SUTTO) 写真|山本康平

# 笠間市構成文化財MAP

JAPAN HERITAGE  
KASAMASHIKO



① 楞嚴寺(山門、木造千手観音立像)

② 笠間氏累代の墓地

③ 三所神社

④ 木造弥勒仏立像<sup>\*1</sup>

⑤ 木造薬師如来立像<sup>\*2</sup>

⑥ 唐本一切経<sup>\*3</sup>

⑦ 稲田神社

⑧ 久野陶園

⑨ 笠間焼発祥に係わる登窯

⑩ 鳳台院山門

⑪ 海鼠釉流掛茶壺(笠間焼初期作品)<sup>\*4</sup>

⑫ 黒釉捏鉢(笠間焼初期作品)<sup>\*5</sup>

⑬ 笠間城跡(笠間城櫓・城門)

⑭ 茨城県立笠間陶芸大学校(旧茨城県窯業指導所)

⑮ 松井康成作品<sup>\*6</sup>

⑯ 春風萬里荘

⑰ 笠間稲荷神社本殿

## 1

### 楞嚴寺(山門・木造千手観音立像) | 国指定

楞嚴寺は、宇都宮氏一族である初代領主、笠間時朝に始まる笠間氏の菩提寺です。国指定重要文化財であり時朝の刻銘がある木造千手観音立像が納められています。また楞嚴寺近くに佇む山門は、室町時代中期に建てられたと言われ、特徴的な切妻造りの茅ぶき屋根は厚く量感のある印象を与えるものであり、国の重要文化財に指定されています。



## 2

### 笠間氏累代の墓地 | 市指定

楞嚴寺から坂道を下り、左手に笠間時朝をはじめ18代にわたり笠間を領した笠間氏一門が眠る墓地があります。大小さまざまな五輪塔がコの字に立ち並んでおり、正面中央にある欠損部分を持つ宝篋印塔が笠間時朝のものとされています。



## 3

### 三所神社

1215年に笠間時朝により、宇都宮の二荒山大明神の分霊を祀り笠間城の鎮守として創建されました。当時、三つの神様を三つの社殿に祀ったことから三社大明神と呼ばれていました。後に三社を合祀し、現在の姿となりました。



## 4

### 木造弥勒仏立像 | 国指定 弥勒協会 収蔵

1247年に製作されましたが、廃仏毀釈の運動によって、当時納められていたお堂が取り払われてしまいましたが、地域の人々によって「弥勒教会」がつくられ、現在の弥勒堂へ手厚く祀られました。像内の墨書名には、造立願主として笠間時朝の名前があります。国の重要文化財に指定されています。



## 5

### 木造薬師如来立像 | 国指定 岩谷寺 収蔵

1253年に製作され笠間時朝が寄進した仏像であり、背面には時朝の名前が刻まれています。薬師如来とは、無病息災を促す仏像であり、木造薬師如来立像も左手に薬壺を持っており、古くから病氣や悩み事を抱える地域の人々に手を差し伸べてきました。国の重要文化財に指定されています。



## 6

### 唐本一切経 | 県指定 笠間稲荷神社 収蔵

1132年頃、中国にて書かれた5000巻を超える仏教の聖典であり、巻末には、1255年に笠間時朝が鹿島神社に奉納したと書かれています。笠間稲荷神社には3巻が納められており、稲田西念寺にも1巻所蔵されています。茨城県の指定文化財に認定されています。



## 7

### 稲田神社

稲田神社は大和朝廷の頃、新治国造により創建された歴史ある神社です。鎌倉時代には、笠間を治める笠間時朝が藤原光俊等を招き、奉納歌会を盛大に催しており、時朝が笠間焼をはじめとする産業・文化を奨励する人物であったことを象徴する場所です。



## 8

### 久野陶園

久野陶園は18世紀頃に、箱田村の久野半右衛門が開いたもので、笠間焼の発祥の地と言われています。時の笠間藩主である牧野貞直は、窯業発展のため久野窯を仕法窯に指定しました。久野窯は益子焼の陶祖である大塚啓三郎が陶芸を学んだ地でもあり、笠間焼と益子焼にとって意味深い場所と言えます。



## 9

### 笠間焼発祥に係る登窯 | 市指定

久野陶園の久野半右衛門が、信楽の陶工・長右衛門の助言の元に築いた窯であり、笠間焼発祥の窯とされています。登窯は傾斜地に斜めに築かれ、中は段々に部屋が分かれ、一番下の部屋で薪を燃やすことで炎が上へ登っていき、各部屋の焼き物が仕上がる仕組みとなっています。笠間市の指定文化財に認定されています。



## 10 鳳台院山門 | 市指定

鳳台院は益子焼の陶祖である大塚啓三郎が寺子屋教育を受けた寺院です。その院内にある江戸時代中期建立の山門は、総檜材の四脚門で、市の指定文化財に認定されています。天井には鳳凰の浮彫が施されており、斗供の組み方からも当時の技術の高さが見て取れます。



## 11 海鼠釉流掛茶壺 (笠間焼初期作品) | 茨城県陶芸美術館 収蔵

笠間焼は江戸時代から明治時代にかけて、日用品を中心に製作され、大量生産により笠間には焼き物屋や従事者が多く集まりました。当時の笠間焼初期作品である海鼠釉流掛茶壺は茨城県陶芸美術館に収蔵されており、この茶壺の特徴である失透の青味を帯びた白濁釉が海鼠釉と呼ばれています。



## 12 黒釉捏鉢 (笠間焼初期作品) | 製陶ふくだ 収蔵

笠間焼は江戸時代から明治時代にかけて、日用品を中心に製作され、大量生産により笠間には焼き物屋や従事者が多く集まりました。当時の笠間焼初期作品である黒釉捏鉢は、内側に流掛が見られ、縁に貼付の模様をあしらわれています。笠間藩主牧野貞直に仕法窯として認定されていた6つの窯のうちの一つを引き継いだ製陶ふくだに今も残されています。



## 13 笠間城跡 (笠間城櫓・城門) | 県指定(櫓) 市指定(城跡・城門)

笠間城は、鎌倉時代に笠間時朝が現在の佐白山に築いた山城です。笠間城は笠間歴代藩主が支配の拠点とした場所であり、久野陶園を仕法窯とした牧野貞直も、笠間城を中心に産業振興に努めたと言われています。現在は城の石垣や登城路が当時の城の面影を残しており、その他にも市内に市指定文化財の城門や、県指定文化財の櫓が真浄寺へ移築され残されています。



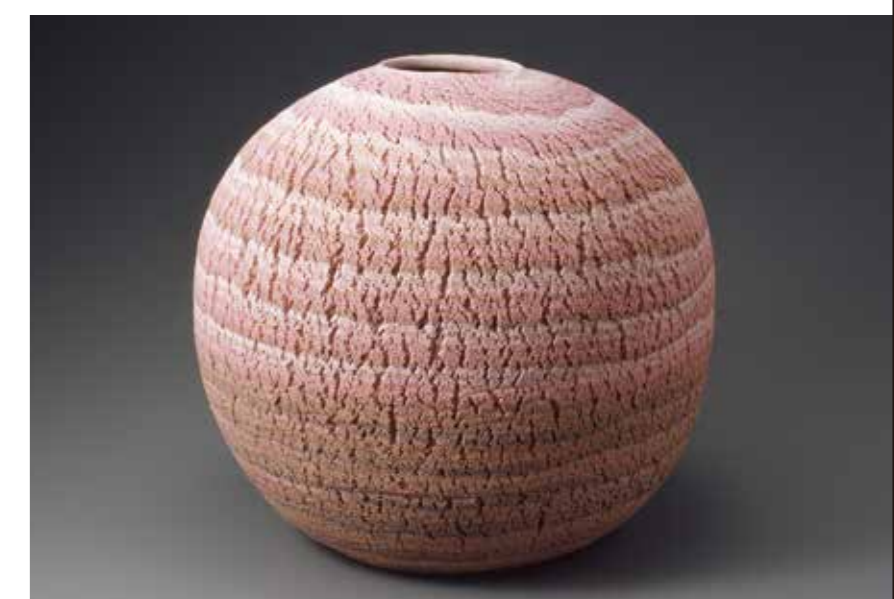
## 14 茨城県立笠間陶芸大学校 (旧茨城県窯業指導所)

茨城県内の窯業業界の生産性向上のため1950年に茨城県窯業指導所が設立され、笠間焼坏土や釉薬等の技術開発や陶芸技術者の養成、全国各地見本市への出品により笠間焼の復興と発展に大きく貢献しました。1995年に現住所に新築移転され、2016年に茨城県立笠間陶芸大学校と改称し、現代陶芸をリードする陶芸家を育てる教育研究機関として一新しました。



## 15 松井康成作品 | 茨城県陶芸美術館 収蔵

重要無形文化財「練上手」保持者として人間国宝に認定された松井康成の作品です。練上とは、色や濃さが異なる土を組み合わせることによって様々な文様を表現する技法であり、非常に高度な技術を求められ、松井康成は一貫して練上の美を追求しました。その創造性豊かな技法は、後進の作家や笠間焼に大きな影響を与えました。



## 16 春風萬里荘

北鎌倉にあった陶芸家である北大路魯山人の旧宅を、笠間芸術の村開村にあたり日動美術館の分館として移築したものです。元は江戸時代に建てられた庄屋の民家で、北大路魯山人は、自身が開いた窯場である星岡窯の母屋として使用していました。茅ぶき入母屋造りの豪壮なうちにも趣深いたたずまいが印象的です。



## 17 笠間稲荷神社本殿 | 国指定

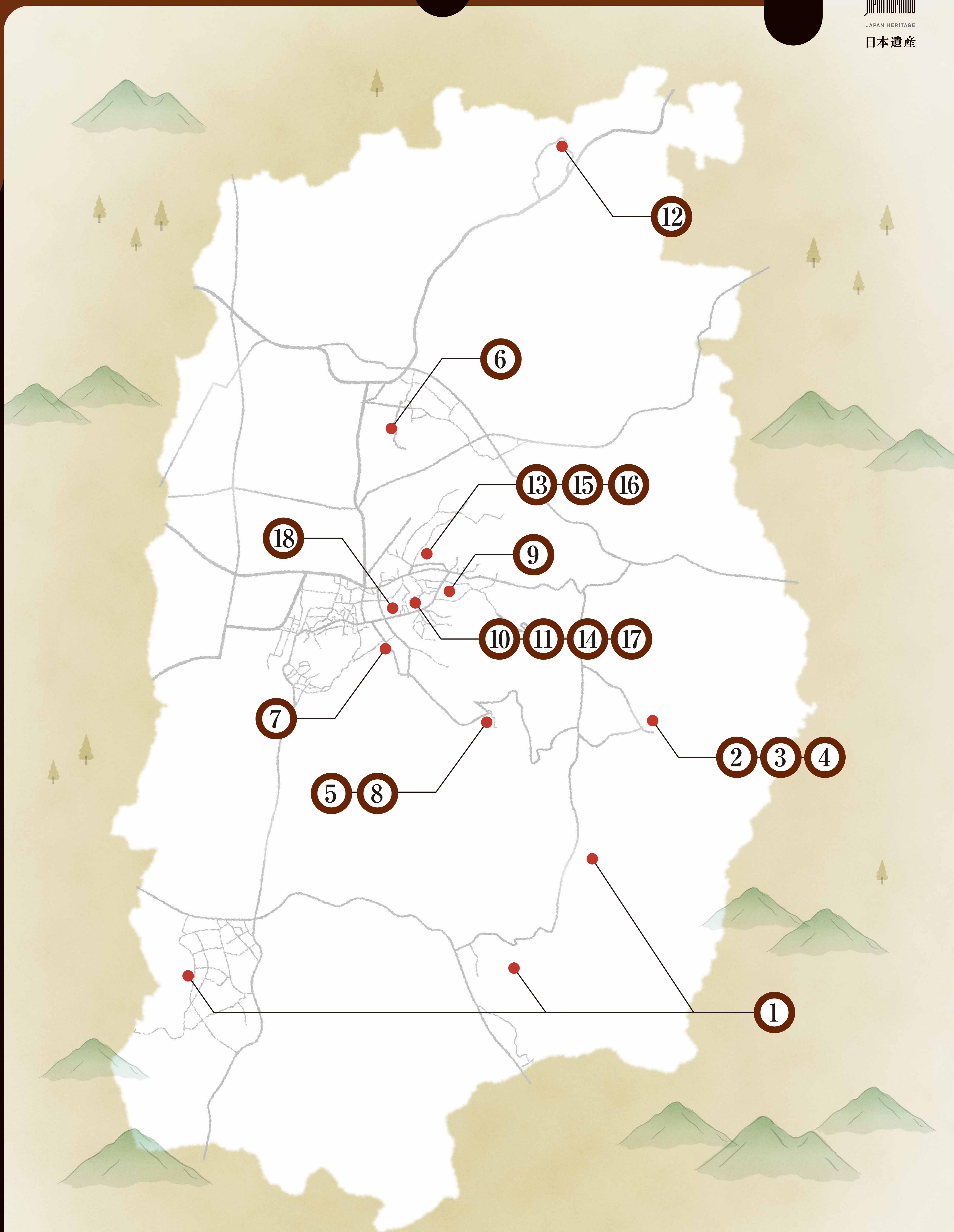
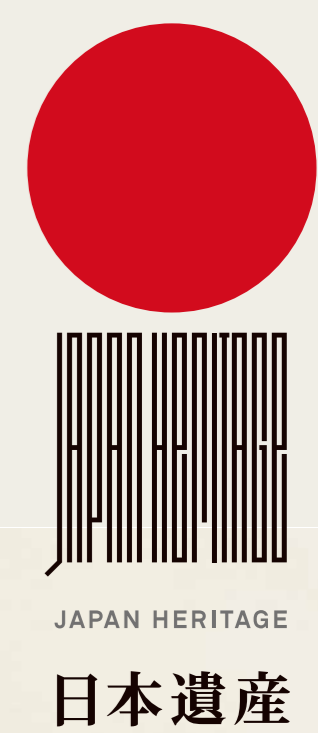
笠間稲荷神社は、笠間焼も含めた殖産興業の神として篤く崇敬された神社です。その本殿には装飾彫刻が施されており、特に「蘭亭曲水の宴」や「三頭八方にらみの竜」といった作品は傑作とされており、それらには後藤縫之助、弥勒寺音八、諸貫万五郎等の工匠名が刻まれています。その見事な彫刻から、国の重要文化財に指定されています。





# 益子町構成文化財MAP

JAPAN HERITAGE  
KASAMASHIKO



- ① 益子古窯跡群  
(西山・本沼窯跡群、原・境窯跡群、栗生窯跡群)
- ② 地藏院本堂
- ③ 宇都宮家の墓所
- ④ 綱神社(撰社大倉神社含む)
- ⑤ 西明寺(三重塔、楼門、本堂内厨子)
- ⑥ 円通寺表門

- ⑦ 根古屋窯(旧益子陶器伝習所)
- ⑧ 陶祖顕彰碑
- ⑨ 岩下製陶(太平窯)登窯
- ⑩ 山水土瓶<sup>\*1</sup>
- ⑪ 汽車土瓶<sup>\*1</sup>
- ⑫ 芦沼石採掘場と益子の柿釉

- ⑬ 濱田庄司作品<sup>\*2</sup>
- ⑭ 島岡達三作品<sup>\*1</sup>
- ⑮ 益子参考館上台・細工場
- ⑯ 益子参考館登り窯
- ⑰ 旧濱田庄司邸母屋
- ⑱ 日下田藍染工房

## 1 益子古窯跡群(西山・本沼窯跡群、原・境窯跡群、栗生窯跡群) | 一部町指定

奈良・平安時代前期(8世紀~10世紀)に操業された古代窯跡群。3群に分かれ、現在14基の窯跡が見つまっている。1基が瓦窯で他は須恵器窯。下野国の2大窯業産地の一つ。笠間市や桜川市などの常陸の窯業産地と同じ技法の、轆轤からの切り離しに「へら切り」を使うことから強いつながりがあると考えられる。



## 2 地藏院本堂 | 国指定

建久4年(1193)に尾羽寺の阿弥陀堂として宇都宮朝綱によって創建された。永正年間(1504~21)に宇都宮氏が再建。元茅葺きで現在は柿葺き型銅板葺き。入母屋造。本尊は延命地藏尊。春日厨子内の阿弥陀三尊像(県指定)の両脇侍は、近年の研究で仏師快慶作ともいわれる。堂内には尾羽寺本尊の阿弥陀三尊像(県指定:平安仏)も安置されている。



## 3 宇都宮家の墓所 | 県指定

宇都宮家第3代朝綱が隠棲した尾羽寺に、初代宗円、2代宗綱、4代業綱の墓を築き、墓付き家臣を置き、自らの墓も定めて宇都宮家の菩提所とした。豊臣秀吉により22代国綱が改易され、その後水戸徳川家に仕えてからも墓を築き、大正時代の33代正綱までまつられている。33代のうち29基が五輪塔である。改易の時、多くの家来が土着し、墓を守り続けた。



## 4 綱神社(摂社大倉神社含む) | 国指定

宇都宮朝綱が公田略取の罪で土佐国に流された時、土佐国一の宮:賀茂明神に祈願したところほどなく帰還を許された。朝綱はこれを喜び尾羽寺内に土佐賀茂明神を勧請して建久5年(1194)建立した。現社殿は大永年間(1521~1528)建立。三間社流造り茅葺き。大同2年(807)創建で、綱神社と同時代の大永7年(1527)建立の大倉神社は一間社流造り茅葺きで、昭和30年(1955)に現在地に移築されたものである。



## 5 西明寺(三重塔、楼門、本堂内厨子) | 国指定

天平9年(737)行基菩薩草創、紀有麻呂建立の古刹。益子氏は紀氏の出身で、清原姓の芳賀氏とともに、紀清両党として宇都宮氏を支えた重臣で西明寺の大旦那。三重塔は天文12年(1543)建立で和様、折衷、禅宗様の三様式。楼門は入母屋造り茅葺きで禅宗様。明応元年(1492)建立。本堂内厨子は応永元年(1394)建立の禅宗様。



## 6 円通寺表門 | 国指定

円通寺は応永9年(1402)良栄上人開山の浄土宗鎮西流名越派大本山。宇都宮氏、益子氏が大旦那として支えた。日本三大学府のひとつに数えられ、38棟の学生寮が設けられ常に数百名の学僧が学んだという。表門は開山時に建てられ、禅宗様四脚門。元茅葺きで現在は銅板葺き。天正2年(1574)正親町天皇の勅願所になると天皇の勅使のみがこの門の通行を許された。



## 7 根古屋窯(旧益子陶器伝習所)

益子焼の陶祖大塚啓三郎が、嘉永6年(1853)益子の根古屋に借地して初めて築いた窯。その後黒羽藩の御用窯となるが明治になって民営に。明治36年(1903)益子陶器業組合が設立されとすぐに大塚啓三郎の息子で組長の塚忠治が、徒弟教育に当たる陶器伝習所を設置した。陶器伝習所はその後場所を移し、町営から県立となって現窯業技術支援センターとなっている。



## 8 陶祖顕彰碑

笠間で焼き物技術を学び益子に伝えた大塚啓三郎は明治9年(1876)に49歳で亡くなったが、その功績を称え、西明寺本堂の脇に明治12年顕彰碑が建てられた。表には啓三郎の経歴が、裏面には益子村の各窯の操業年代が刻まれている。碑文は元笠間藩士、加藤桜老の撰による。



## 9 岩下製陶(太平窯)登窯 | 町指定

2基があり、どちらも各部屋の床に窯砂を敷いた砂窯形式をとる。民藝運動が広がる以前の代表的な益子焼の歴史を残す。東側は第2代の太平が明治26年(1893)に築いた。当初13室あったが現在は8室が残る。西側の窯は大正7年(1918)築窯で当初11室で昭和28(1953)年の改修で10室となった。現存する登窯では関東以北最大である。



## 10 山水土瓶 | 益子陶芸美術館 / 陶芸メッセ・益子 収蔵

益子焼の代表的な焼き物のひとつ。白泥を掛けた白っぽい土瓶に信楽流の山水画を模した絵が描かれている。特に昭和天皇の御前で山水画を描いた皆川マスの作品が有名である。陛下は「冴えも無き媼おきなの描く陶物を人のめつるもおもしろきかな」と詠まれた。



## 11 汽車土瓶 | 益子陶芸美術館 / 陶芸メッセ・益子 収蔵

明治22年(1889)静岡駅の駅弁屋が信楽焼の土瓶に静岡茶を入れて販売したのが汽車土瓶の始まりとされる。その後美濃焼、常滑焼などとともに益子焼でも生産が始まり静岡駅以東東北地方まで33駅で益子焼の汽車土瓶が確認されている。昭和30年代まで生産販売された。



## 12 芦沼石採掘場と益子の柿釉

益子焼の主要な釉薬である柿釉(渋い茶色)は、凝灰岩の一種である芦沼石を原料にしている。大塚啓三郎と同時期に開窯した菊池清蔵が発見したという。芦沼石は単独で柿釉に、木灰を混ぜれば黒釉も作れるため重宝された。現在はごく一部の作家などがたまに採掘しているが、ほぼ閉鎖状態である。



## 13 濱田庄司作品 | 町指定 濱田庄司記念益子参考館 収蔵

昭和30年(1955)第1回人間国宝に認定され、柳宗悦、河井寛次郎らとともに民藝運動の中心人物であった濱田庄司の作品。益子参考館所蔵の5点が町指定文化財になっている。昭和53年死去。ひしゃくに入れた釉薬を大胆に掛ける「流し掛け」技法が特徴。



## 14 島岡達三作品 | 町指定 益子陶芸美術館 / 陶芸メッセ・益子 収蔵

濱田庄司に師事し独立後組紐師であった父や李朝陶器の影響を受けた独自の技法である縄文象嵌もんどうがんを中心に作陶した。成形してまだ素地の柔らかいうちに表面に組紐を転がして縄文の紋様をつけるものである。島岡達三は平成8年(1996)に濱田に次いで人間国宝となった。平成19年死去。



## 15 益子参考館上台 | 県指定、細工場 | 町指定

上台は濱田庄司が来客の宿泊用に町内の小宅から10年かけて移築したもの。江戸時代末期創建の寄棟造茅葺き。豪農の家。桁行14間、梁間7間で茅葺屋根としては県内最大級の建物である。細工場も町内上大羽にあった製陶所の細工場を昭和16年(1941)に移築したものである。



## 16 益子参考館登り窯 | 町指定

8室に分かれている。昭和18年(1943)築窯。人間国宝濱田庄司によって築かれ、昭和53年(1978)に83歳で死去するまでの間、年2~3回の窯焼きを行い、数々の名品を世に送り出した。「濱田庄司登り窯復活プロジェクト」で笠間と益子の作家の絆が深まった。



## 17 旧濱田庄司邸母屋 | 町指定

人間国宝濱田庄司が母屋兼作業場として使用していたものである。平成元年(1989)に陶芸メッセ・益子内に移築した。木造平屋建て茅葺。江戸時代後期に市貝町で建築されたものを濱田が気に入り、昭和5年(1930)に移築した。囲炉裏のそばには蹴ロクロと手ロクロがあり、長屋門内の仕事場や細工場とともに作陶の中心となっていた。

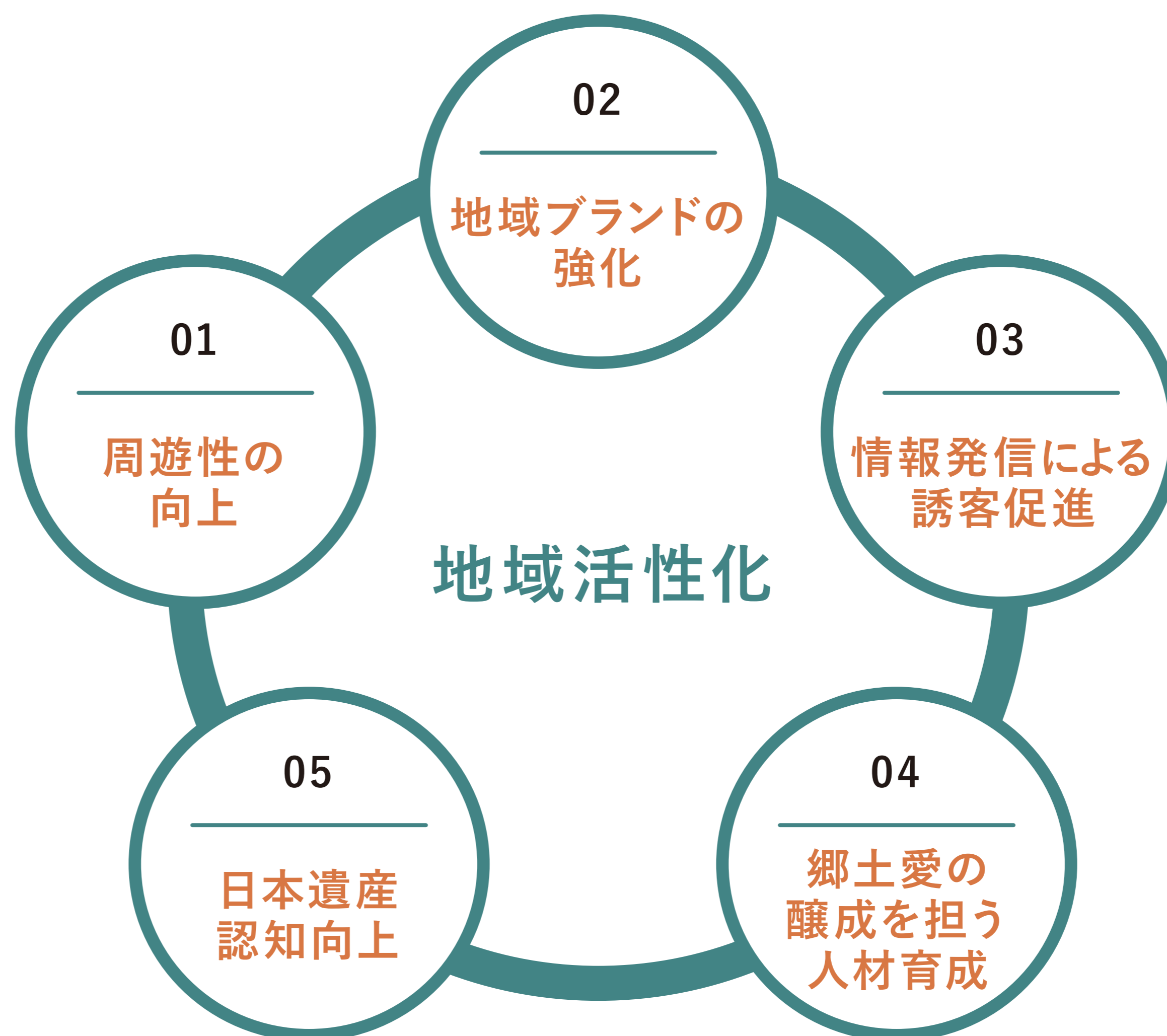


## 18 日下田藍染工房 | 県指定

日下田邸(染色工房併用)は木造平屋建て寄棟造茅葺き曲屋で寛政年間(1789~1801)の建造。藍染甕場も寛政年間の建造で、土間に容積180ℓの常滑焼の藍甕を72個規則的に埋め、周囲を三和土わたかと呼ばれる技法で固めている。現在も使用している。民藝運動に共感し、民藝調の藍染をはじめ、草木染作品を現在も作り続けている。



かしましこには、豊かな自然と多彩な芸術、受け継がれてきた伝統、まちの発展を支え続けた多様な産業など、先人たちが築き上げてきた固有の文化が息づいています。かしましこ日本遺産活性化協議会では、それらの潜在的な文化芸術資源の魅力を引き出し、市民・民間事業者間の連携を強化することで周遊性の高い観光スタイルを確立させ、国内外からの誘客を促進し、イベントに依存した観光客受入れから平日も集まる通年型の観光地の実現に努めて参ります。



## 01 | 周遊性の向上

地域の遺産をより身近に感じることができる受入環境の整備や周遊性の向上を図る。

- インバウンドにも対応した多言語説明板・案内板等を設置する。
- 構成文化財の解説・案内を実施するためのデジタルサイネージやタブレットを整備する。
- サイクルツーリズムによる誘客を推進し地域の魅力を向上させる。

## 02 | 地域ブランドの強化

地域の活性化のため調査研究により地域ブランドの強化を推進する。

- 外国人モニターツアーとして、両産地に興味のある方を招待し改善を図る。
- 来訪者の消費動向調査を実施し、地域ブランド力の強化を図る。

## 03 | 情報発信による誘客促進

地域の魅力を最大限に活用した情報発信により誘客力向上を図る。

- 多言語対応したホームページを開設し、PR動画作成・SNS等による情報発信を行う。

## 04 | 郷土愛の醸成を担う人材育成

地域住民参加による日本遺産の推進及び郷土愛の醸成を担う人材育成を進める。

- ガイド・コーディネーター育成のため、インバウンドに対応した講習会等を実施する。
- 持続可能な地域として継続させるため郷土愛を醸成する活動を推進する。

## 05 | 日本遺産認知向上

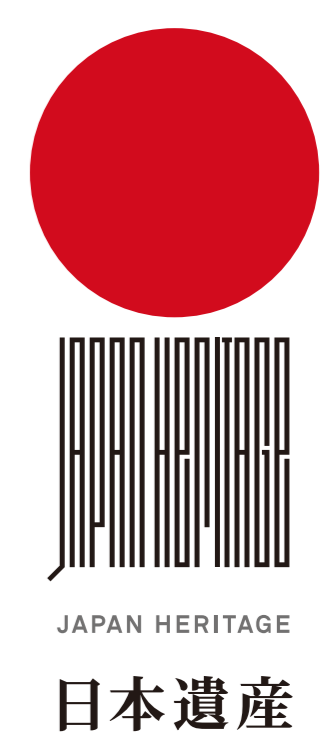
地域資源を活かし普及啓発を進め交流人口の増加を図る。

- 文化財を活用したラーニングバケーション等の構築を図り、交流人口を増加させ活性化を図る。



# 「かさましこ」

## 主な年間イベント



### 笠間市

### 益子町

あたご山桜まつり  
笠間つつじまつり  
笠間の陶炎祭

日本ゴルフツアー選手権/  
グリーンフェスタかさま

全国こども陶芸展 in かさま

十六夜まつり  
灯籠流し  
笠間のまつり

かさま新栗まつり  
笠間浪漫

笠間の菊まつり

陶と暮らし。  
流鏝馬

かさま陶芸の里  
ハーフマラソン大会  
悪態まつり

初詣  
彩初窯市  
かさまの陶雛～桃宴～

4

春の益子陶器市

あじさい祭り  
(献花祭・献燈講社祭)

大祓式・茅の輪くぐり神事・  
夏越祭・陶板大神輿渡御

6

祇園祭

手筒花火  
御神酒頂戴式  
御上覧神事

7

ひまわり祭り  
益子夜市

8

益子さんぽ市

9

コスモス祭り

10

秋の益子陶器市

11

ポターリングましこ

トレラン益子  
はが路ふれあいマラソン

12

益子焼初売り

1

菜の花・桜祭り

3

